教育から地元貢献を目指す

鹿児島県立短期大学 学長
種村（たねむら） 完司（かんじ）さん
Kanji Tanemura

本年4月に鹿児島県立短期大学の新学長に就任した種村完司さん。

種村さんは、愛知県名古屋市の出身でプロ野球中日ドラゴンズの大ファン。子どものころは負けず嫌いのガキ大将だったが、高校時代に「文学」と出会い、京都大学文学部に進学。そこでさまざまな学生活動を通して、地域や社会とのつながりの大切さを感じたという。

大学院に進学してからは「哲学」と「倫理学」のおもしろさや奥深さに目覚め、生涯の専攻科目とされている。

モットーは「不正義に苦しむ人々、不遇・不幸な人々への関心・共感・援助を忘れない」。

そんな種村新学長に鹿児島の教育事情や今年設立60周年を迎えた「県短」での抱負などを語っていただいた。

「今は学長業務に専念中で講義はできないが、学生とのコミュニケーションは大事にしたい」と種村学長。

常に社会に関心をもつことの大切さを伝えたい

教育者を志したきっかけは

私の学生時代はベトナム戦争や日韓条約反対運動、70年日米安保条約改定などの問題が頻発し、ものすごく政治色の強い時代でした。

政治や社会情勢に関心を持ちながらも、社会とか人間について、深く捉え直したいという思いから、私を含め多くの仲間が哲学の道に進みました。そのころは就職のことはあまり考えてなかったのですが、いざ就職するとなると哲学での就職先はあまりないのが現実でした。

それでも研究論文の発表などを続け、鹿児島大学教育学部に社会科倫理学の担当教師として赴任することができました。ここで初めて本格的に教育と向き合うことになるのですが、初めのころは、ゼミに来る学生が少なく非常に残念な思いをしました。原因としては、私が研究者の立場で哲学を教えていたので、学生にしてみればおもしろくなかったのではないか。このままではいけないと思い、授業の内容を難しい倫理学の根本問題から、学生の関心に沿ったテーマを取り上げるように変えました。例えば「現代社会における環境と倫理」、「いのちと倫理」、「現代家族における倫理」といった現代問題から倫理をおもしろく伝えるようにしたのです。

それから3、4年くらいはかかりましたが徐々にゼミに来る学生も増え、やっと学生たちと心の交流ができるようになったと思います。また、卒業生が教師になってからも、いろんな悩みなどを相談しに訪ねてくれるようになり、さらに教育の楽しみが倍加しました。

種村さんにとって鹿児島とは

初めのころは、言葉に驚きました。鹿児島の人同士の会話が半分くらいしか分からなかったので、この人たちと付き合っていけるのだろうかと不安になりました。33年経ってかなり理解はできるようになりましたが、鹿児島弁を話すことはまだできないですね。

鹿児島に来て10年くらい経ったころには、第二のふるさとと思っていましたが、今では、たくさんの友人、知人がいますし、何より卒業生たちが訪ねてきてくれるので、鹿児島がふるさとそのものです。

また、学生時代からボランティア活動に取り組んでいますが、鹿児島に来てからは「鹿児島いのちの電話」での夜間電話相談や妻の闘病生活に寄り添った経験から「鹿児島緩和ケアネットワーク」の活動にも参加しています。これらのボランティア活動を通して地域との結びつきも深まったこともあり、このまま鹿児島に骨をうずめようと考えています。

鹿児島の教育について

鹿児島の場合、どうしても関東や関西へ優秀な人材が流出しています。ある意味では、日本全体に貢献しているということでいいのですが、やっぱり鹿児島に残って、鹿児島の文化や教育に力を注いでくれる人材が欲しいと思います。

そのためには、県外の有名大学に輩出するだけでなく、鹿児島の高校や大学でも優れた人材を育てて、地元に貢献してもらえるように教育の底上げを図る必要があります。

それと併せて、自治体や企業の協力が必要ですが、鹿児島で育った優秀な人材を県内で受け入れるための職場をもっと増やしていただきたいと思います。

「高校時代から続けている硬式テニスのおかげで、体は丈夫な方です」と種村学長。

新学長に就任されて感じたことは

少子化が進んでいく中でも、ありがたいことに鹿児島には「県短ブランド」というものがあって、レベルの高い学生が来てくれています。

それでも年々1ポイントくらいずつ受験倍率が下がってきているのも事実で、もっと魅力ある県短に変えていかなければなりません。

例えば、学生にはいろいろな体験活動をしてもらっていますが、2年ないし3年と、期間的に短く学外に出る機会も少ないため、県短の学生は真面目でおとなしいという評価もあります。もっと自分の良さを外にアピールし、活躍の場を開拓できるような学生を育てる工夫が必要になります。

なかなか難しい課題ではありますが、先生方と一緒になって、もっと学生が生き生きと学生生活を送ることができる県短になれるよう頑張っていこうと思います。